中級レベルの日本語学習者のコミュニケーション能力の現状とニーズ

―日本・中国・韓国の学習者を対象とした調査と実践を通して―

許　明子　　金　東奎　　姚　艶玲

要　旨

本研究は、日本・中国・韓国で学ぶ中級レベルの日本語学習者を対象に日本語能力とコミュニケーション活動の関係について考察したものである。日本と中国で学ぶ学生を対象に行った意識調査では、漢字語彙、文法等のインプットの技能については自信を持っている反面、会話や作文等のアウトプットの技能については自信を持っていないことが分かった。また、日本語によるコミュニケーションの必要性を感じているものの、日本語を使う場が不足している現状が明らかになった。このような傾向は日本国内の学習者だけではなく、中国や韓国で学ぶ学習者にも共通の傾向が見られた。

以上の現状を踏まえ、韓国では日本語の授業においてコミュニケーション・タスクを通した実践を行い、コミュニケーション活動の必要性を認識させることができた。

【キーワード】コミュニケーション能力　現状　学習者ニーズ

Current Conditions and Needs of Communicative Abilities of Intermediate Japanese Learners : Japanese learners in Japan, China and Korea

HEO Myeongja, KIM Dongkyu, YAO Yanling

【Abstract】This paper aims at analyzing consciousness of intermediate learners studying Japanese in Japan, Korea and China in regard to communicative ability and problems in daily life. The results reveal that these learners were confident in input elements such as Japanese grammar and vocabulary, while lacking in confidence in output elements such as speaking and writing. Results also indicate that the learners were having trouble in daily life. Not only in Japan but also in Korea and China, the importance of Japanese language education is being recognized to improve communication and management skills in Japanese, and concrete curricula are being implemented. As a result, the importance of useful and practical Japanese education is reconfirmed.

【Keywords】communicative ability, state and needs of Japanese learners

1．はじめに

海外における日本語学習者数は約398万人で、中国が約105万人、次いで韓国が約84万人を擁しており、この２カ国の学習者は世界の日本語学習者の47％を占めている[1]。日本国内における日本語学習者数は約14万人で、国別には中国人学習者が約６万４千人で最も多く、次いで韓国人学習者が約１万人で、中国、韓国人学習者が全体の約52％に達している[2]。海外のみならず日本国内の日本語学習において、中国人と韓国人学習者の占める割合は非常に大きく、この２カ国は重要な位置づけであることが分かる。

非母語話者が個々の状況で、どのように日本語を使っているかという非母語話者のコミュニケーションについての研究が必要である（野田 2012：14）。本研究の目的は、日本国内で日本語を学んでいる学習者及び韓国・中国で日本語を学んでいる学習者の現状やニーズに関する調査を通して、今後の日本語教育のあり方について検討するためのヒントを得ることにある。

日本国内については筑波大学留学生センターで日本語を学んでいる学習者を対象に、日本での日常生活でコミュニケーション活動をどのように感じているのか、またどのような場面でコミュニケーション能力が必要だと感じているのか、コミュニケーション能力を向上させるために必要な日本語力は何か等に関する調査結果の分析を行う。中国については、大連外国語大学日本語学院で学んでいる学習者を対象に行ったコミュニケーション能力に関する意識調査の分析結果を述べる。また、韓国については韓国外国語大学校日本語大学でコミュニケーション能力の向上を目的として行われた実践を通して、非母語話者の日本語学習とコミュニケーションに関する意識や日本語能力等について考察を行う。

2．筑波大学で学ぶ学習者の場合

今回の調査の対象は中級レベル[3]で学んでいる学習者50名である。筑波大学留学生センター日本語補講コースでは日本語力によって初級から上級までレベルが分けられており、各クラスには英語や中国語等色々な言語を母語とする学習者が混在している。

今回の調査の概要は以下の通りである。

①調査期間：2012年10月～12月

②日本の滞在期間：半年未満が29名、50名全員が３年未満であった。

③日本語学習歴：１年未満が５名、２年未満が11名、３年未満が13名、４年から６年の学生も16名であった。

④母語別：中国語母語話者35名、韓国語母語話者３名、英語母語話者３名、その他の言語９名であった。

⑤質問項目：自信がある日本語の技能は何か、日本人とのコミュニケーションに自信があるか、コミュニケーションに困った経験と場面、日本での生活でコミュニケー

ション能力が必要だと感じる場面等[4]。

2.1　コミュニケーション能力に関する意識

質問項目の中で、日本語によるコミュニケーションに自信があるかという質問に対して、自信があると答えたのは20名、自信がないと答えたのは27名、無回答が3名で、中級レベルに達した学習者であってもコミュニケーション能力に自信が持てない学生が多いことが分かる。日本語学習歴が3年以上の学習者(20名）であってもコミュニケーションに自信があるという回答は8名、自信がないという回答は12名であった。

日本語の技能別科目の中で自信がある科目は、「漢字」が最も多く16名（33%）で、次いで「文法」が13名（27%)、「読む」が7名（14%)、「話す」と「聞く」が5名(10%)、「書く」が3名（6%）の順であった。これをグラフで示すと図1のようになる。

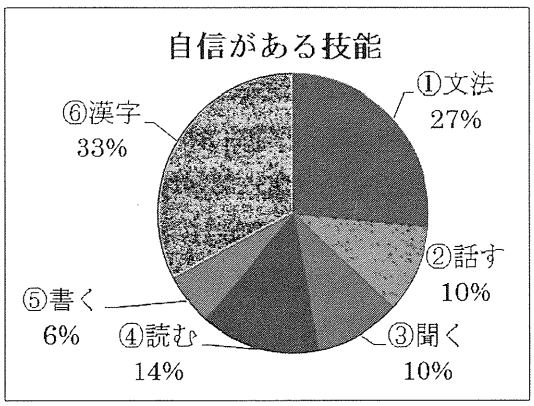

図1　日本語の自信がある技能

自信があると答えた上位3技能はいずれもインプット系の技能であり、下位3技能はアウトプット系の技能である。つまり、日本語の産出に必要な技能に自信が持てないということが分かった。今回の調査対象の50名のうち中国語母語話者が35名で約7割を占めているため、漢字に自信があると答えた学習者の割合が大きいのは頷けるが、「話す」と「書く」というコミュニケーションをとる手段として必要な技能に自信がないと感じる学習者が多いことは注目すべき結果である。

調査対象のうち、中国人学習者の場合、自信があると答えた上位技能は漢字が15名（44%)、次いで「読む」が7名（20%)、「文法」が5名（15%）で、この結果がコミュニケーションに自信がないという全体の結果につながっていると言える。中国人学習者以外の学習者が自信があると答えた上位3技能は、「文法」が8名（53%)、「話す」が3名（20%)、「聞く」が2名（13%）の順番であり、人数は少ないものの中国人学習者より、アウトプット系の技能に自信を持っていることが分かる。

また、中国人学習者がコミュニケーションに自信が持てない理由は「分かっていても正確に使えない」「発音が悪い」「聞く力が弱いから、話したいことがうまく伝えられない」等が挙げられており、これについても産出力の不足がコミュニケーション活動にも影響していることがうかがえる。中国人学習者以外は「語彙力がないから、相手の話が聞き取れない」「日本人の考え方はヨーロッパとは違うから」等の理由が挙げられており、産出力

の問題より理解力の問題が大きいことが分かった。これらの結果から、学習者のミュニケーション能力に関する自信度は学習者の母語と深い関連があると言える。

2.2　コミュニケーション活動の現状

日本人とのコミュニケーションを行うときに困った場面や理由に関する記述ではアカデミックな場面と日常的な場面の両方、具体的な場面の記述が見られた。アカデミックな場面では、指導教員と丁寧に話すとき、ゼミや勉強会で発表したり質問に答えたりするとき、研究室で先輩と話すとき、研究計画や実験等について説明するとき等が挙げられており、敬語を使ったり丁寧な話し方が必要な場面が多かった。

日常的な場面では、銀行や空港等で日本人と話すとき、新しい宿舎に引っ越したいとき、部活で使っている言葉が分からなかったとき、アルバイト先で仕事の指示が理解できなかったとき、日本人の友達の話しことばが分からなかったとき、等が挙げられており、終助詞や若者言葉等の話し言葉を使用する場面が多かった。また、日本人のあいまいな表現に対して返事や対応の仕方が分からないと答えた学生もいて、コミュニケーション活動に混乱を感じる場面が多岐にわたっていることが分かった。

また、母語と日本語の表現の違いやコミュニケーション・スタイルの違いに関する記述では、具体的な文法項目や日本人の表現の仕方に関するものも挙げられていた。文法項目は語順、助詞、終助詞、オノマトペ、あいづち、敬語、受身文のように具体的な項目が挙げられており、表現の仕方の違いについては、日本人のあいまいな表現、婉曲な表現、否定の意味を言わない、日本人は優しいけど距離感を感じる、等のような学習者の印象的なものが多く含まれていた。中級レベル以上の学習者は、コミュニケーション活動に役に立つ、もしくは、学ぶ必要性を感じる項目については、多少難しくても「面白い」と感じ、チャレンジしたいと考えているという実践報告がある（許他 2013：87）。文法の中でも難しいと感じる項目が多く挙げられているが、学習者のニーズを捉えてコミュニケーション能力の向上につながるような実践が必要である。

次に、コミュニケーション・スタイルの違いによって、日本人に誤解された経験の有無に関する質問には40名から誤解されたことがあるという回答が得られた。具体的には、「自分の意志を表現する口調が激しく表現が強いと言われた、変な表現を使っていると言われた、自分の日本語を友達に笑われた、作文の内容について考え方が違うことを先生に指摘された、肯定の意味の返事だったのに否定の意味だと誤解された、言葉や発音を間違えて言いたいことを理解してもらえなかった」等の例が挙げられていた。スーパーやアルバイト先、銀行、自転車販売店、飲み会、等の日常的な場面で色々な誤解が生じており、ある時は責任が問われるような場面もあったようである。

2.3　コミュニケーション活動のニーズ

日本での生活で、コミュニケーション能力が必要だと感じた場面に関する質問に対して最も多かった回答は、先生やチューターと話すとき、専門の授業で自分の意見を正確に説明したいとき、等のアカデミックな場面であった。他には日本人と話したい、友達を作りたい、初めて会った人と上手に話したい、等の日本への興味や生活を楽しくするために、コミュニケーション能力が必要だと感じている学生も多かった。

次に、コミュニケーション能力を高めるために必要な日本語の学習に関する質問には、「話す」「書く」技能の上達が必要という回答が最も多く、日本人と話す機会を作りたいという希望も多く挙げられていた。回答の中には、日本語の学習だけではなく、日本人の習慣や俗語等についても勉強する必要があるという記述もあった。学習者は自分のコミュニケーション能力について内省をしており、日本人との交流の必要性も感じていることが分かる。

しかし、日本語及びコミュニケーション能力を高めるために実施していることについては、テレビを見たり、ニュースを聞いたりしているという回答が最も多かった。日本人との交流の必要性を感じていながらも実際は交流の機会が持てず、学習者自身が色々な学習方法を探っていることが分かった。日本国内で日本語を学ぶ学習者は海外で日本語を学ぶ学習者に比べて、日本語に触れる機会が多く、日本人との交流も活発に行われていることが期待されているが、実際はコミュニケーションの場が十分に与えられていないのが現状である。学習者のニーズに応えられるようなコミュニケーションができる交流の場を設けることが早急の課題であると言える。

3．中国大連外国語大学で学ぶ学習者の場合

これまで日本国内におけるいわゆる「非母語話者のコミュニケーション」に注目する研究（野田編 2012）はあるが、海外で、つまり外国語環境下で学んでいる日本語学習者がどんな状況で、何のために、日本語によるコミュニケーションを行っているのかという実態調査とそれに関連する研究はあまり見られない。そこで本章では、中国で日本語を学んでいる日本語学習者を対象にニーズ調査を行い、日本語によるコミュニケーションの現状とニーズの分析を行うことにする。

筆者（姚）の勤務校である大連外国語大学は、故周恩来総理の指示の下で1964年に創立され、その前身は「大連日本語専門学校」であった。日本語教育は50年間の歴史を有しており、2013年１月現在、日本語教育に携わっている日本語学科の教員数は84人で、在籍している日本語本科生は2800人、大学院生は200人にも達している。教員数と学生数はいずれも中国で最多であり、海外で最も規模の大きい日本語教育機関であると言われている。学生に対する日本語能力の養成において、「聴説領先（聞く能力と話す能力が特に堪能）」

ということが、日本語学科設立当時からの伝統であり、特長でもある。

3．1　調査の概要

本調査の調査時期は2012年12月であり、大連外国語大学日本語学院で行われた。調査は日本語コミュニケーションに対する学習者自身の意識や内省を明らかにするために、自由記述式を用い、質問紙を配布して実施した。調査項目は日本語コミュニケーション能力を中心に、教室内と教室外のコミュニケーション活動に分かれ、「聞く」「話す」「読む」「書く」という言語活動の別に、それぞれ教室内は16問、教室外は13問と、合計29項目の質問を作成した。

被調査者は全員が日本語学院の学生であり、学年別に一年生が91名、二年生が130名、三年生が94名、四年生が76名、計391名の日本語学習者を対象に調査を実施した。調査は学年別に授業時間内に実施し、調査用紙に記入してもらった後その場で回収した。収集した回答に対して、学年ごとに項目別に記述内容を写しながら集計を行いまとめた。

【本調査の課題】

①教室の中で「聞く、話す、読む、書く」というコミュニケーション活動がどのように行われ、今後はどのような工夫が必要であると考えているのか。

②教室以外のどのような状況で日本語によるコミュニケーションが必要とされているのか。

③教室以外でどのようなコミュニケーション活動を行っているのか、今後はどのような能力が必要であると考えているのか。

3．2　調査の結果と分析

3．2．1　教室内の日本語コミュニケーション調査の結果と分析

授業の中で教師の使用言語（日本語か中国語）について、その使用の割合及びどのような使い分けが効果的なのかという日本語使用に関する認識について質問した。その回答をまとめた結果、授業の現場では学年による違いはあるものの、教師による日本語使用の割合が80％～90％になっているのに対して、学習者にとっては日本語による授業が望まれているが、文法項目の説明や場面・状況等の背景知識が必要な、理解に困難を感じている場合は、中国語の使用が望ましく、日本語より自分の注意をひきつけ、効率的であると考えている。

3．2．2　日本人教師との日本語コミュニケーション

日本人教師とのコミュニケーションにおいてどのような内容で交流が行われ、またどのような状況で問題を感じているのかという設問に対して、授業中では主にテキストや授業

内容を中心にコミュニケーション活動が行われ、それ以外は日本人の習慣や日常生活という話題も交わされている。また日本人教師とのコミュニケーションの中で、「相手の話が完全に理解できず、自分の言いたいことがうまく表せない」というのが学習者の抱えている大きな問題であり、中日間の文化的な違いや日本人教師の話が速すぎることにも困難を感じているようである。

3.2.3　日本語の四技能の言語活動の難しさとニーズ

「聞く」「話す」「読む」「書く」という四技能の言語活動の中でどれが一番難しいのかという設問の回答を集計した結果、一年生の場合は「聞く」、その次が「話す」であるのに対して、二、三、四年生は「話す」が一番難しく、その次が「聞く」であった。学習者にとって学習を始めたときにはまず相手の日本語を「聞き取る」能力、学習段階が進むのにつれて自分から日本語を「話す」能力がそれぞれ求められているということが分かった。

教室の中で4技能によるコミュニケーション活動がどのように行われ、今後はどのような工夫が必要であると考えているのかについて、8項目の質問を設けた。

教室の中の「聞く」活動に関して、「先生の話した日本語を聞く」ということがほとんどであり、授業活動としては「リスニング」という授業で音声資料やニュース等を聞くという形で行われている。今後はテキストに拘らず日本のテレビ番組やドラマ、NHKニュース等課外の様々な「聞く」の素材を多く使用し、学習者の「聞く」興味を引くような教室活動の工夫が必要であると考えられている。

教室の中の「話す」活動に関して、「先生の質問に日本語で答える」という教師との会話練習や会話のやり取りがほとんどであり、それ以外は学生によるスピーチの形の日本語発表も多く取り入れられている。今後は教師との間だけでなく、学生同士によるグループ討論等の協動的な「話す」学習活動が望まれ、また学生の「話す」機会をもっと増やし、さらに日本人留学生を教室に招くような共同授業を実施してほしいというニーズがあることが分かった。

一方、教室の中の「読む」活動に関して、「テキストを読んで、その内容を分析し、主旨を理解する」ということが主な授業形態であった。これに対して、これからは日本語の小説や新聞等課外の読み物も読んだりして、先生による良質の文学作品やウェブサイトの紹介等、多様な「読む」材料を提供してほしいという要望があった。限られた時間内に文章を読んで理解するという「スピード読解」の能力が必要であると考えられている。

教室の中の「書く」活動においては、「作文」という授業で「作文を書く」、または「基礎日本語」や「上級日本語」という授業で感想文や日本語発表を書いたりするのが現在の授業活動であった。今後の「書く」練習については実際の生活に直接結びつくような話題を選定すること、そして手紙、メール、論文等異なる種類のものを「書く」力がつくよう

な授業が必要であると言える。さらに「書く」ための方法やテクニック、文章構成法等の説明も増やしてほしいというニーズがあった。

3.2.4　教室外での日本人とのコミュニケーション活動

教室の外では日本人とコミュニケーションを行う機会がほとんどなく、たまに日本人留学生との交流や「日本語コーナー」で日本人教師と交流する機会があるだけであった。

日本語の使用が必要な場面は日本人教師や日本人留学生と会ったときや、街（空港や料理店、観光先等）で偶然に日本人に出会った場合等に限られている。また日本語の映画やテレビ、アニメ等を見たり漫画を読んだり、ネットで日本語のホームページを見たりウェブサイトを検索したりする等の場合、さらに日系企業で実習を行なう等の場合も日本語の使用が必要であった。

3.2.5　教室外のコミュニケーション活動の現状とニーズ

教室以外の「聞く」活動に関して、学習者が日本の映画、ドラマ、アニメ、バラエティ番組、歌、及びNHKニュース等の媒体によって、多く「聞く」活動を行っている。今後必要な「聞く」能力としては、日本人の日常的な会話が聞き取れ、やり取りができることや、字幕を見ずに日本語のアニメや歌が聞ける等のような現実的なコミュニケーション能力である。

一方、教室以外の実際の「話す」活動は非常に少なく、キャンパスの中で「日本語コーナー」に参加したりして、日本人の先生や留学生と交流を行う等といったことだけであった。今後は流暢さを養い、日常生活等で日本人とある話題について普通に議論ができるような「話す」能力が必要である。

そして、教室以外の実際の「読む」活動においては日本語の小説や雑誌、漫画等を読むことが多く見られ、日本の商品の説明書やネットで日本語のホームページ、広告等を読むこともあった。また、日本語の新聞や歌詞、そしてお知らせや要旨等が読めるような、日常生活に即した「読む」力が求められている。

一方、教室以外の「書く」活動が比較的少なく、日本の友人とのメールのやり取り、年賀状や葉書を出したり、日本語でブログ、（四年生の場合は）履歴書を書いたり、好きな日本のアイドル歌手や芸能人に応援メッセージを書いたりする等であった。そして「書く」能力は、文法的な間違いがなく、自然な日本語の表現でなめらかに書けるようなコミュニケーション力が必要である。

3.3　日本語教育への提言

以上のような活動に対して、学習者が必要であると考えているコミュニケーション能力

とは、相手の話の大よその意味が速やかに聞き取れ、自分の考えを的確に、文法的な間違いがなく言い表すことができること、そして日本語の文章が辞書を引かずに読めて、その主旨を理解し、文法や語彙の使用の間違いがなく、日本人の「書く」習慣に従うように書けることである。

以上の学習者による日本語コミュニケーションの現状とニーズを踏まえて、教育現場では異文化コミュニケーションの視点から言語機能を重視しながら、実際に日本人と関わりを持つ社会的実践を進めるべきことを提案する（品田 2012：159-162参照）。教室活動を学習者の言語生活に沿わせること、つまり学習者にとって現実的に日本語を使って遂行する必要のある活動を中心に組み立てていくことが学習者の日本語コミュニケーション力をつけるために有効な教育方法であると考える。

4．韓国外国語大学校で学ぶ学習者の場合

4．1　韓国の日本語教育におけるコミュニケーション教育の現状

韓国における日本語授業の多くは、いわゆる「教師主導」の基に、言語形式の学習・習得に焦点が置かれていることが多いようだ。韓国人学習者によく見られる「ペーパーテストでは高得点を獲得するが、会話能力はその高得点に見合わないレベルである」ことや「漢字や言葉の意味についての知識は豊富だが、不自然な表現（韓国語を直訳したような表現）を多用する」等といった問題点は、言語形式に関する知識・情報に目が行き過ぎて、その言語形式を「どのように使う（表現・理解する）か」といった点、つまり、コミュニケーションという観点を疎かにしたせいであると思われる（金 2012：76-77）。日本国内で学ぶ学習者の「話したいことがうまく伝えられない」という現状、中国国内で学ぶ学習者の「自分の言いたいことがうまく表せない」という現状同様、韓国国内で学ぶ学習者も「うまく伝えることができない」というコミュニケーションの問題を感じている。つまり、日本・中国・韓国の学習環境より「どのように伝えるか」という問題が、学習者のコミュニケーション能力に関する大きな問題ではないかと思う。

韓国のコミュニケーション教育の現状についてさらに述べるとしよう。全体的には、韓国の現状は、日本・中国とはやはり異なる部分があり、日本と中国の中間的な位置であると言える。

まず、日本の調査項目であるコミュニケーションの場面に関しては、韓国人学習者は、アカデミックな場面においては、抽象的な内容に関する表現と理解に興味があるようだ。日常的な場面においては、日本語のコミュニケーションの特殊性と共にコミュニケーションそのものの一般性にも興味があると見える（詳細は後述）。具体的な場面においては、意見を収集した結果、旅行・趣味・買い物に関するコミュニケーションに興味がある学習者が多かった。つまり、日本人との交流のためにコミュニケーション能力を高めたいと思っ

ている部分は、韓国においても日本の現状と共通している部分と言える。

次は、（大学の）学習環境に関する問題点であるが、これについて詳細な報告をした中国と比較して述べたいと思う。「聞く・話す」技能については、中国では、主に教師とのコミュニケーションとそれに基づいた環境のバリエーションの不足が問題点として挙げられているが、韓国の場合、多くの学習者はインターネットや携帯電話のチャット等の媒体やドラマ・映画等のコンテンツに親しんでおり、それを利用する環境も整っている。なお、韓国には日本人教師だけでなく、（韓国語の勉強のための）日本人留学生や日本人移住者、日本関連のサークル活動等がコミュニケーションの相手として存在しており、日本国内程度ではないが、上述した媒体を使用すれば、ある程度、日本語を用いたコミュニケーションの相手を見つけることができる。

ところが、「読む・書く」に関する現状は中国とそれほど変わらない。「読む」の場合、韓国の学習者の多くは、授業で教科書を読むだけにとどまることが多い。「読む」に関する教室活動においても、文型・文法の指導に重点が置かれている場合が多く、学習者のコミュニケーションにおけるニーズをすべて満たしているとは言えない。「書く」は、筆者が担当した学習者が最も「苦手意識」を持っている技能で、韓国においては多くの学習者が同様な問題を感じているようだ。それには「作文」に関するカリキュラムや授業が十分ではないという現状もあり、これらについては更なる調査と問題点の把握が必要である。

このように韓国のコミュニケーション能力・教育の現状は、日本・中国とはまた異なる部分があり、ある意味では中間的な位置にあるとも言える。ただし、最近は、コミュニケーション能力を念頭に置いた実践が日本・中国と同様、韓国の日本語教育においても増えつつある。その数はまだ多くないが、今後さらに発展していくことが期待される。

4．2　韓国人日本語学習者のコミュニケーションについての意識の一面

本節では、韓国の大学で行われた実践の結果から、韓国人日本語学習者のコミュニケーションについての意識を探ってみたいと思う。

1）実践の概要

韓国外国語大学校における日本語の授業（→実践）を対象としている。科目名は「日本の言語と文化」である。2013年度1学期の授業で、中上級レベルの学習者が受講している。実践は、1段階：理論－2段階：理論と実践1－第3段階：実践2（口頭発表会）の3段階の構成で行われる。実践1と実践2では「コミュニケーション・タスク」が行われる。本稿は、第3段階の実践2を対象にしている。

2）「コミュニケーション・タスク」と資料（データ）

「コミュニケーション・タスク」は、当日の学習内容に添った「表現意図」（依頼・申し出等）と「待遇コミュニケーション」における五つの要素（人間関係・場・意識・内容・

形式）を学習者に提示し、それらについてグループ内の「話し合い」を通じて、スクリプト（「コミュニケーション・タスク」の成果物）を作成し、スクリプトを発表・検討する一連の教室活動である（金 2012a、2012b）。学習者のコミュニケーションについての意識を探るため、本稿ではスクリプト発表における学習者のコメントを用いた。本稿における分析・考察の対象となった「コミュニケーション・タスク」は次の通りである。

＜コミュニケーション・タスク：依頼－断り－お詫び／依頼－承諾－お礼＞
自分は1週間ほど名古屋で行われる世界日本語教育学会に参加することになりました。その間、飼っている猫の世話を誰かに頼まなければなりません。依頼－断り－お詫び（相手1）と依頼－承諾－お礼（相手2）のメールのやりとりのスクリプトを作成してください。
自分：田中春子、大学3年の女子学生（20代）
相手1：日本人の知り合い、20代の女性、中村秋子、相手レベル0
相手2：日本人の先生、50代の男性、伊藤一郎、相手レベル＋1
場・媒体：文章／メール
※相手1にメールを送って、断られたあと、相手2にメールを送り、承諾される流れ。

データは、学習者が上の「コミュニケーション・タスク」を用いた活動の中で書いた自由形式のコメントから抽出した。コメントはスクリプトの発表を聞いて書いたもので、日本語で作成している。本稿では、そのコメントの中で学習者が自らの意識について記述したコメントをデータとして用いた。

3）学習者の意識の詳細

①論理性：コミュニケーションの論理性についての意識である。これは、コミュニケーションに関する意識の中でも最も基本となる意識で、「そのコミュニケーションは当然なものかどうか」ということである。具体的には、表現をしてもいい事情なのかどうか、唐突な表現はないのか、事情説明はしっかりできているのか、等に関することである。

②談話の構成：スクリプトの構成についての意識である。①の「論理性」が談話の内容における、いわゆる「ロジック」についての意識だとしたら、「構成」は談話の「形式」についての意識である。学習者は言語形式のひとつひとつだけなく、スクリプト全体の「構成」や「流れ」についての意識を持っていた。

③相手への配慮：コミュニケーションにおける相手への配慮についての意識である。コミュニケーションは相手が存在してこそ成立するもので、常に相手のことを考えなければならない。そのような意味では、相手を意識することはコミュニケーションにおいて最も

重要なことであり、学習者もそのような意識を持っているということが確認できた。なお、ただ「相手（の存在）についての意識」ではなく、「相手のことを配慮するという意識」を持っているということが分かった。具体的には、相手の理解についての配慮、相手に合わせた待遇的な配慮についての意識がコメントから確認できた。

④分かりやすさ：コミュニケーションそのものが分かりやすいかどうかに関する意識である。「分かりやすさ」を決める要因は様々であり、上の①と②も「分かりやすさ」にかかわる項目であると言える。ただし、実践において学習者が挙げているのは「内容の分かりやすさ」であった。また、これは、③相手への配慮とも関係がある意識であると思われる。

⑤言語形式の正確さ：スクリプトに用いた日本語の表現形式の正確さについての意識である。コミュニケーションにおける「言語形式の正確さ」は、正しい文法、的確な語彙の使用だけでなく、不明確な表現を使わないということ等で表されるもので、円滑なコミュニケーションのためには、学習者が必ず意識しなかればならない項目であり、そのような意識を持っていることが分かった。

4.3　韓国の日本語教育におけるコミュニケーション教育の課題 ―実践における学習者の意識から―

コミュニケーションには「普遍性」と「個別性」の二つの側面がある。その二つの側面をコミュニケーション教育にバランスよく取り組む必要があるということについての異論は少ないだろう。韓国の大学の実践から確認した「コミュニケーション・タスク」における学習者の意識は、論理性・談話の構成・相手への配慮・分かりやすさ・言語形式の正確さのように「普遍性」を持っている項目が多いということが分かった。これらの項目は、言語を用いた人間の円滑なコミュニケーションには共通すると言える「普遍的で一般的」なことである。

しかし、「普遍性」だけでなく、日本語の「個別性」についての意識があるということについても認識しなければならない。まず、相手と状況に応じて待遇的な配慮（たとえば、敬語）が必要であるという意識は、待遇表現・敬語体系が韓国語のそれとは異なる体系で発達した日本語の敬語の特徴、つまり、日本語のコミュニケーションの「個別性」の影響であると思われる。周知の通り、韓国語にも敬語体系が存在しており、それは韓国語のコミュニケーションに影響を与えている。しかし、相対敬語と説明される日本語の敬語体系は、絶対敬語の韓国語の敬語体系とは、異なる使用様相を見せている。学習者は、この日本語の敬語の使用の「個別性」を意識したのではないかと思われる。また、当然性が低い依頼においては、（当然性を高めるために）事情説明を十分に行う（蒲谷他 2009：110-111）という日本語の依頼コミュニケーションの特徴、つまり、日本語のコミュニケーションの

「個別性」があり、学習者はそれに対する意識を持っているということが分かった。

このようにコミュニケーションには「普遍性・一般性」と「個別性・特殊性」がある。これをバランスよくコミュニケーション教育に取り入れるということは、韓国の日本語教育に必要な観点であると思う。特に日本語とは言語系統的に近い故に、共通点も多い韓国語を母語とする韓国人学習者において、このようなコミュニケーションにおける共通点と相違点についての認識は、学習に有効であると思われる。なお、このような考え方は、韓国だけでなく他の地域における日本語教育にも適用できるのではないだろうか。特に、学習者の出身・母語が様々な場合が多い日本国内の日本語教室においては、コミュニケーションの「普遍性」と「個別性」に基づいたコミュニケーション教育がさらに有効なのかもしれない。

5．おわりに

本稿では日本、中国、韓国で日本語を学んでいる中級レベルの学習者を対象に、日本語によるコミュニケーション能力についてアンケート調査を実施し、現状とニーズを中心に分析を行った。近年、日本語教育におけるコミュニケーション能力の重要さが叫ばれており、学習者の意識も変化しており、ニーズも高いことが分かった。韓国外国語大学校での実践のように、日本語教育の現場では様々な工夫を施し、コミュニケーション能力を向上させるための実践が行われている。一方、学習者のニーズに対してコミュニケーション活動の場が十分に与えられているとは言えないのが現状である。日本語を学び、日本語によるコミュニケーション活動が行える場を設けることが急務であると言える。今後も学習者のコミュニケーション能力に対するニーズを的確に捉えた日本語教育の実践を目指していきたい。

注

1．国際交流基金2012年外界日本語教育機関調査
http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/result/survey12.html（2013年12月5日アクセス）

2．文化庁 平成24年度国内の日本語教育の概要
http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/jittaichousa/h24/gaikoku_6_03.html
（2013年12月5日アクセス）

3．日本語学習時間総数が500時間から700時間程度の学生であり、筑波大学留学生センター補講コースJ500レベルからJ700レベルまでの学習者を指す。

4．資料1を参照されたい。

5．コメントは原文のまま転記したものである。

付記

本研究は平成24年度人文社会系グローバル人材育成活動の全学エクスパンション事業「コミュニケーション活動を重視した日本語学習法の提案のための基盤研究―日本、韓国、中国における日本語学習者の調査分析を通して」（研究代表者：許明子）の助成を受けたものである。データ収集・作成にご協力くださった筑波大学、中国大連外国語大学の皆さん及び韓国での実践に協力してくださった韓国外国語大学校の皆さんに感謝いたします。

参考文献

蒲谷宏・金東奎・高木美嘉（2009）『敬語表現ハンドブック』大修館書店：77-161

蒲谷宏（2013）『待遇コミュニケーション論』大修館書店：5-63

金東奎（2005）「「待遇コミュニケーション」における「敬語表現化」に関する考察―待遇表現教育のあり方への視座―」『早稲田大学日本語教育研究第７号』早稲田大学大学院日本語教育研究科：67-80

_____（2010）「コミュニケーション活動型授業の考え方とその位置づけについて」『日本研究第45号』韓国外国語大学校日本研究所：289-306

_____（2011a）「コミュニケーション活動型授業の実践について―伝え合う日本語７の実例を通して―」『日本研究第47号』韓国外国語大学校日本研究所：157-174

_____（2011b）「韓国人学習者における配慮表現の使用様相について―中級以上の大学生の学習者を対象に―」『2011年度世界日本語教育大会予稿集』（中国、天津外国語大学校）：551-552

_____（2012a）「「待遇コミュニケーション」教育における学習者の意識と「言語形式」の結合について―中上級の韓国人大学生学習者を対象にした実践から―」『早稲田日本語教育研究』第11号、早稲田大学日本語教育研究科：75-91

_____（2012b）「コミュニケーション・タスクから見た中上級学習者の「意識」と「言語形式」の問題―韓国の大学における実践から―」『日本語教育国際研究大会名古屋2012予稿集第２分冊』日本語教育学会等：181

品田潤子（2012）「コミュニケーションのための日本語教育の方法」野田尚史編『日本語教育のためのコミュニケーション研究』くろしお出版：147-166

野田尚史編（2012）『日本語教育のためのコミュニケーション研究』くろしお出版：1-11

許明子・宮崎恵子・青木幸子（2013）「学習者のための中級日本語教育文法の在り方」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第28号：85-104

＜資料１＞

日本語によるコミュニケーション活動についてのご質問

1．質問

※以下の質問にあなたの経験や考え方について、具体的に書いてください。

（1）次の６つの技能の中で、あなたが日本語について自信があると思う技能を順番に番号を書いてください。

①文法（　　）

②話す（　　）

③聞く（　　）

④読む（　　）

⑤書く（　　）

⑥漢字（　　）

（2）日本人とコミュニケーションをとることに自信がありますか。○をつけてください。

（　ある　　ない　）

上の○をつけた理由について書いてください。

（3）今まで日本人とのコミュニケーションに困ったことがありますか。ある方は、誰と、どんなときだったのか、その場面と困った内容について書いてください。

（5）今まであなたの日本語の話し方、表現などで、日本人に誤解されたことがありますか。それはどんな場面で、誰から、どのような誤解でしたか

（6）日本での生活で、もっとコミュニケーション能力を高めたいと感じたことがありますか。それは誰と話すときですか。どんな場面ですか。

（7）コミュニケーション能力を高めるために、日本語の学習に必要だと思うことはありますか。それはなんですか。

2．フェイス・シート(Face sheet, Background information)

(1)氏名(Name)

(2)国籍(Nationality)　　(3)母語(Mother language)

(4)年齢(Age)　　(5)性別(sex)

(6) いつ日本に来ましたか？　　年　　月　　日

(7)日本語学習歴　（どんな教科書？どんな勉強？いつ？どこで？どのぐらいの期間？など）

いつから：

どのぐらい：

＜資料２＞

关于日语专业大学生日语交际活动的现状与意识的调查

一、请回答关于您的个人情况。

1.性别：　　男　　女

2.年级：　　级

3.是否通过日语能力测试？　　是　　否

4.通过了的话，请填写级别和分数。 级别：　　分数：

二、请回答以下设问，用汉语填写在空白处，字数不限。

（一） 关于课堂内的日语交际活动

1.现在你上的所有日语课上，各类型课程老师授课时使用日语和汉语比例的情况？

2.你认为老师授课时日语和汉语的使用该怎样安排效果更好？

3.在课堂上除去回答问题，你和老师沟通时是用汉语还是用日语？

4.在课堂上你和日本人外教进行交流时，大多是关于哪些方面的内容？

5.在课堂上和日本人外教进行交流时，你感到沟通比较困难的时候，或沟通比较困难的事情是什么？

6.你认为“听、说、读、写”四项交际活动中，哪一项对你来说最难？

7.在现在的课堂上是如何进行“听”这种交际活动能力的学习与练习的？

8.你认为在今后的课堂上应该采取什么样的形式来提高“听”的交际活动能力？

9.在现在的课堂上是如何进行“说”这种交际活动能力的学习与练习的？

10.你认为在今后的课堂上应该采取什么样的形式来提高“说”的交际活动能力？

11.在现在的课堂上是如何进行“读”这种交际活动能力的学习与练习的？

12.你认为在今后的课堂上应该采取什么样的形式来提高“读”的交际活动能力？

13.在现在的课堂上是如何进行“写”这种交际活动能力的学习与练习的？

14.你认为在今后的课堂上应该采取什么样的形式来提高“写”的交际活动能力？

15.你认为现在使用的日语教材中有没有和实际日语交际活动脱节的地方？如有请举例说明。

16.你认为现在的日语课堂内容有没有和实际的日语交际活动脱节的地方？如有请举例说明。

（二） 关于课堂外的日语交际活动

1.除日本人外教外，在课堂以外你有没有和日本人交流的机会？

2.在课堂以外的日常活动中，你在什么情况下（或你认为在什么情况下）会需要使用日语？

3.在课堂以外你有没有用日语进行“听”的交际活动？有的话是什么情形？（或什么时候你必须使用日语来“听”？）

4.你认为今后在“听”的方面需要什么样的能力？

5.在课堂以外你有没有用日语进行“说”的交际活动？有的话是什么情形？（或什么时候你必须使用日语来“说”？）

6.你认为今后在“说”的方面需要什么样的能力？

7.在课堂以外你有没有用日语进行“读”的交际活动？有的话是什么情形？（或什么时候你必须使用日语来“读”？）

8.你认为今后在“读”的方面需要什么样的能力？

9.在课堂以外你有没有用日语进行“写”的交际活动？有的话是什么情形？（或什么时候你必须使用日语来“写”？）

10.你认为今后在“写”的方面需要什么样的能力？

11.在现实的“听、说、读、写”交际活动中，什么情况下你感到（或你会感到）交流有问题或有困难？

12.在你尚不具备充分的交际能力时，你采用（或你会采用）什么办法来克服这些困难？

13.对你来说在现实的“听、说、读、写”交际活动中，什么最简单？什么最难？